

神奈川小児科医会ニュース

第15号

平成19年3月15日

横浜市中区富士見町3-1 TEL 045-241-7000 FAX 045-241-1464

神奈川小児科医会のゆくえ

神奈川小児科医会 副会長 横田 俊一郎
(小田原市 横田小児科医院)

本年6月より、寺道会長と交代で日本小児科医会の常任理事を拝命しました。担当は広報部で、日本小児科医会ニュースと会報の発行、ホームページを受け持つことになりましたが、まだ右も左もわからず、キョロキョロと周りを見回している状態です。

小児科医会の目的は何でしょうか。「小児科学会は学術的活動を中心に、小児医療の質と量の確保などを主たる目的として、日本のすべての小児科医が入会しているのに対し、小児科医会は主として臨床小児科医から成り、小児医療の充実を目指すとともに、日本の将来を担う子どもたちが健全にすくすく育つために、小児科医がいかなる役割を果たしたらよいか、社会にどのように提言し実践していくべきかを考え、活動する会である」と、今年の小児科医会セミナーを主催された兵庫県小児科医会神尾守房会長は、日本小児科医会会報に書かれています。社会に提言し実践していくという点において、小児科医会はより子どもに近いところにいると言えるかもしれません。

私は地区医師会の理事を10年以上務めています。小児科医会の活動は医師会の活動に似ています。地域の住民のために提言し実践するのは地域医師会の使命でもあります。その医師会の活動の中で、中心になるのは学術と親睦だと最初に先輩から教わりました。確かに地域住民のために提言し実践するためには、まず正確で新しい知識・情報が必要です。また、医師会としてまとまって活動するためには、お互いを知ること、すなわち親睦が大切だということを感じて身にしみて感じるようになりました。

神奈川県に戻って考えてみます。神奈川小児科医会は全国の都道府県小児科医会の中でも特異な立場にあります。それは、日本小児科学会地方会の下部組織として存在しているということです。全国の小児科医会の中では有数の会員数を持ち、多くの役員や委員を日本小児科医会へ送り込んでいる県小児科医会としては、基盤がやや不安定な感じがあります。これにはいろいろな経緯があり、じょうずに運営さ

れてきたわけですが、医会としての独立性を示さなくてはならない時期に来ているようにも感じます。

また、大都市横浜、川崎があり、横須賀、相模原という政令指定都市を抱えた県として、一つにまとまるためには困難もあります。この4つの大きな市以外では、市町村ごとに地区小児科医会がありますが、会員が少ないために運営が難しい小児科医会もあるようです。いくつかの小児科医会が集まって、もう少し広い地域の小児科医会として活動すれば、近隣の行政へ同じような働きかけができるようになるでしょうし、講演会などの開催も容易になるのではないのでしょうか。そして、これらの地区小児科医会の集合体として神奈川小児科医会が活動することを考えてはどうでしょうか。昨年のゴールドエンウィークに米国合同小児科学会(PAS)へ出かけてきました。日本の小児科医会の活動を行っているのは米国小児科学会で、サンフランシスコ地区の会長を務めている日系の小児科医に話を聞く機会がありましたが、米国はこのあたりの編成が上手に行われていると感じました。

実際の活動では、各地区小児科医会単位で、臨床に基づいた研究を勧めることが必要だと思います。基礎的な研究や講演は小児科学会地方会へ任せ、実際に多くの患者さんに接する小児科医でなければできない調査・研究を進めなくてはなりません。大阪地区ではこのような活動が盛んですし、それによって会員相互の親睦も深まることが期待できます。また、政治的な活動も大切です。今でも予防接種や診療報酬についていろいろな活動は行われているのですが、その成果を会員に示すことがじゅうぶんではないように感じます。成果を示せなければ、会員の求心力も必ず落ちていきます。そのためには政治的な活動を、もっと会員にも知ってもらう方法を検討することも必要ではないかと思っています。副部会長として十分な活動ができないまま4期目となっていますが、神奈川小児科医会にも新しい波がやってくることを願っています。

特集 第16回日本外来小児科学会年次集会

第16回日本外来小児科学会年次集会を開催して

会 頭 挨 拶

横浜市立大学大学院医学研究科 発生成育小児医療学 教授 横 田 俊 平

2006年9月2～3日にパシフィコ横浜にて第16回日本外来小児科学会が開催されました。わが国の小児医療が岐路に差ししかっている現在、「進めよう！協働の輪，育てよう！探求心の芽，吹かせよう！新しい小児医療の風」を合い言葉に，約2年間の準備期間を経て学会は生き生きとかつ盛大に催されました。

当日には約2,300名の参加者が集い，本学会の特徴であるたくさんのワークショップ，ミート・ザ・エキスパートなどでたいへん熱い議論が闘わされ，たくさんのプロダクトが生まれました。

この学会は準備も当日の運営も自前で行うことが伝統になっていますが，今回も教室の西巻医師を中心に26名の実行委員が毎月毎月集まり準備を整えてきました。プログラムの編成，演題募集と割り振り，また当日の運営に必要な物品の収集，受付の手配，各会場のパワーポイントなどの設営まで，ありとあらゆることを自分たちの手で準備しましたが，実行委員たちのご苦勞は並大抵のものではありませんでした。しかしその分，学会創設以来はじめて2,000名を超える方々が集い，また参加者一人ひとりから「素晴らしい学会であった」との言葉を戴いて，苦勞の甲斐があったと実行委員ともども喜んでおります。当初は多少気恥ずかしい気持ちもあったのですが，実行委員はみなで思い思いの模様のアロハ・シャツを着て，運営に当たりました。結果的には，お揃いのアロハ・シャツで協働意識が高まり，学会を盛り上げるのに大いに役に立ったようです。

小児医療はいま，大きな問題に直面しています。小児救急の問題，小児科医の少医化の問題，小児科研修のシステム化の問題，女性小児科医の勤務形態改善の問題，障害児医療の問題など，挙げればきりがありません。どれも重い問題ですが，いずれも小児科医自身が解決するしかないものばかりです。まだどのような筋道を付ければよいかも判りません。そうであれば，小児科医がみなで知恵を出し合い，議論をすることで，この国の未来を担う子ども達のために何をすればよいかが少しずつ判ってくるのだと思うのです。今回の学会は，まさにこのためにあったのだといまさらながら思うのです。協働することの強さ，疑問を掘り下げる探究心，そして私たち小児科医自身が大きな風を吹かせること，この学会を通じて私たちが学んだことです。今後，あらゆる機会を通じて，ここで得たことを広げていきたいと思ひます。

第16回日本外来小児科学会年次集会を終えて

第16回日本外来小児科学会年次集会事務局 横浜市立大学医学部小児科 西 巻 滋



日本外来小児科学会年次集会は小児科医のみならず、小児科で働く看護師、事務員、保育士、薬剤師などのメディカルの方々が参加者の半数であること、そして講演などを聴講するだけの“消極的な参加”だけではなく、小グループで討論するワークショップ（WS）での参加、即ち“積極的な参加”が多いことが特徴です。

そこで第16回日本外来小児科学会年次集会は、21世紀を子どもの世紀としたい、その子どもを支える医療を打ち立てたい、子どもに関わるさまざまな分野の人々と協働する輪を広げたい、という願いを込め、メインテーマを、次のように決め、2006年9月2日（土）、3日（日）にパシフィコ横浜（横浜市）で開催されました。

「進めよう！協働の輪 育てよう！探究心の芽 吹かせよう！新しい小児医療の風」

プログラム抜粋

会長講演：

横田 俊平（横浜市立大学医学部小児科）

「小児科医の可能性と小児医療の明るい未来について」

講演：

高山ジョニー（成育医療センター）

「米国における小児臨床研究について」

森田 ゆり（エンパワメントセンター）

「生きる力のみなもとへ

子どもの虐待に向き合うとき」

青山 興司（岡山医療センター）

「小児外科医の診察室から

ー子どもたちとともにー」

内山登紀夫（よこはま発達クリニック）

「歴史上の人物における高機能自閉症・アスペルガー症候群」

MTE：

寺島 和光（神奈川こども医療センター）

「聞いて得するわかりやすい小児泌尿器科」

（他科に聞きたいシリーズ泌尿器科）

鳥飼 勝行（横浜市大センター病院形成外科）

「形は機能を変えるー小児外表奇形の形成術ー」

（他科に聞きたいシリーズ形成外科）

寺本 典代（寺本耳鼻咽喉科）

「小児の急性中耳炎の治療法をめぐって・小児科医が耳鼻科医に聞きたいこと」

（他科に聞きたいシリーズ耳鼻咽喉科）

大豆生田啓友（関東学院大学）

「いまどきの子育て、何が問題？何がどう変わったの？」

田代 眞一（昭和薬科大学）

「小児科開業医に役立つ漢方の知識」





神山 潤（東京北社会保険病院）

「元気な子どもは遊んで食べてしっかり眠る」

加治 正行（静岡市保健福祉局保健衛生部）

「こどものための卒煙外来」

幕内 秀夫（フーズ&ヘルス研究所）

「小児医療と食生活

－子どもの食を守るために－」

佐藤奈々子（横浜市立大学附属病院看護部）

「子どもの力を引き出す小児看護の技あれこれ」

島山 和人（こども保育環境研究所）

「保育環境と成長から考える遊具選びと遊びの効果」

佐々木 洋（佐々木歯科）

「口から育つところと身体

－新生児から小児までの子育て支援－」

（他科に聞きたいシリーズ歯科）

森實 秀子（こにし・もりざね眼科）

「乳幼児期の視覚の発達

（見逃したくない目の病気）」

（他科に聞きたいシリーズ眼科）

教育セミナー：

金子 一成（関西医科大学小児科）

「経口補水療法の実際」

森 雅亮（横浜市立大学小児科）

「抗インフルエンザ薬の使い方のコツ」

及川 馨（小児科・内科及川医院）

「安全な予防接種をめざして」

帆足 英一（ほあし子どものこころクリニック）

「明日から役立つ夜尿症治療の実際」

山本 淳，小林 晴美（星川小児クリニック）

「ナースと一緒にだからできる小児ぜんそく外来診療のコツ」

牛島 廣治（東京大学発達医科学）

「ウイルス性下痢症の最近の話題」

拡大WS：

「すてきなあなたになるために」「すてきなクリニックになるために」

公開シンポジウム：

「横浜からの新しい風－こどものこころと医療－」

WSは49，拡大WSは3になり，講演，Meet the Expert（MTE），教育セミナーなども，小児を取り巻く医学や看護だけでなく，保健，育児，教育，福祉，食事，睡眠，遊びなど多方面の内容となり，23を数えました。

事前登録者は1,273名と前年とほぼ同数でしたが，当日登録者が863名で，前年を約300人も上回る2,115名の参加者となりました。

年次集会事務局では，この会を実行するに際して，とくに次のことを心掛けました。

1. コメディカルが参加したい年次集会にしよう

テーマに「協働」を掲げ，コメディカルが参加したいと思うような講演，WS，教育セミナー等の内容を心掛けました。

実践プログラム：「トリアージ能力を磨く－第一印象による看護診断－」

子どもの病状を把握し，診察の優先や隔離など，現場で活用できる判断力を養うために，外来の受付や待合室で行う「第一印象による看護診断」を取り上げました。コメディカルを対象に開催し，300名を超える参加者がありました。

MTE：「子どもの力を引き出す小児看護の「技」あれこれ」



看護師を対象の講演のひとつでしたが、立ち見も出るほどの聴講者で、その後の実演コーナーでも数百人の方がお立ち寄り下さいました。実演された「癒しボトル」は多くのクリニックで活躍しているのでしょうか。

病児保育室見学：館外での開催でしたが130名が参加下さり、その関心の高さが示されました。

2. 参加者が楽しい年次集会にしよう

折角、横浜にお出で頂くのですから、懇親会は中華街にご案内しよう、と考えました。しかし500から600人を収容できる店はないので、中華街の6店の分散開催としました。各店100名前後でかえって和気あいあいとなりました。スタッフも含め603名が中華街で夜を過ごしました。各会場を会長が挨拶に回りましたが、どの店も、賑やかで、これは喜んで頂けたと自負しております。

また、夕方にはコンサート（春季カンファランスでも好評でした「ザ・ヘディアトリックス」のミニゲリラライブ）、絵本の読み聞かせ（WS34「小児科医と絵本」のリーダー達が中心）を行いました。また勉強と議論に疲れた方にはリラックスして頂こうとビアパーティも行ないました。400個用意したコップが無くなり、ホテルから100個、追加しました。

3. スタッフも楽しい年次集会にしよう

例年、スタッフはユニフォーム姿です。今年はアロハシャツにしました。会長も例外ではありませんでした。アロハシャツを着た人は、実行委員とそのクリニックのスタッフ、そして学生です。各自が好きな色、柄を選んだので、かえって華やかな感じがでたと思います。

また今回の年次集会では、横浜市立大学医学部5年生18人、4年生1人が手伝ってくれました。私たちの医学部は1学年の定員が60名と少ないので、これは1学年の3割になります。彼らは臨床講義やBSLが始まり、小児科に触れてこの学会に手伝いの手を挙げてくれました。将来が楽しみです。

4. 優しい年次集会にしよう

プログラムも少し工夫しました。表紙を開いたらすぐにスケジュールを載せ、さらに本文中のページが分かるようにしましたが、使い勝手は如何でした

か？そしてその表紙、そしてポスターなどのデザインは如何でしたか？優しい雰囲気になろうと、実行委員の外来に来てくれた子どもたちに描いてもらった絵を取り入れました。

ネームカードフォルダーの寄付も行い、総額3万円を超える寄付を頂きました。ご賛同下さった参加者の方々、ありがとうございました。

また、30を超える患者、親の会のブースにも大きなスペースを割きました。多くの参加者の方がブースにお立ち寄り下さいました。

来年の第17回年次集会は、島田 康先生（しまだ 小児科／上天草市）を会長として、2007年8月25日（土）－26日（日）、熊本市の熊本県立劇場で開催されます。テーマは「これまでと、今を見つめ、次の世代へ向け考えよう」です。多くの方のご参加をお待ちしています。

この内容は「愛育ねっとトピックス」にも掲載されています（2006年11月掲載<http://www.aiiku.or.jp/>）。

実行委員印象記

第16回日本外来小児科学会年次集会の実行委員として

横浜市金沢区 大久保医院 大久保慎一

外来小児学会は、開業している小児科医が会員となり発展してきた学会で、最近はその会員の関係する医療スタッフも年次集会に多数参加している。

今回の年次集会は、横浜市立大学の横田教授が会長でしたので、私は実行委員の一人としてお手伝いをした。

私の受け持った1日目の仕事は、①「招待者・座長・講師受付、ネームホルダー寄付受付」、②「他科に聞きたいシリーズ」講演の鳥飼教授の座長、③総会の議長、④懇親会の運営でした。2日目の仕事は、上記の①と公開シンポジウムの記録係でした。上記の受付を当院のスタッフ4名と一緒にした。スタッフは緊張していたが、合間の時間に会場を見学もでき、貴重な経験をしたとよろこんでいた。

運営委員の先生とは、今回初めて知り合った方が半数でしたが、先生方の委員会での熱心な討論、集会での仕事の熱心さに感動した。

第16回日本外来小児科学会年次集会の委員として

横浜市港南区 下永谷こどもクリニック
半澤 典生

実行委員会は横田教授・西巻準教授を中心に開業医が主体の28名で2004年4月に結成されました。西巻先生から誘われたときはこんな僕でいいのかな？と迷いましたが思い切って参加しました。最初の頃は年数回の会合で、山本淳先生や佐藤順一先生を中心に出了意見やアイデアを検討し、西巻先生がまとめ、さらにMLでの意見交換という風に進みました。会合は増え、個々の分担が決まり、そして向かえた本番はあっという間の2日間でした。自分達で準備し、自院のスタッフ達にも手伝ってもらった手作り感覚の学会だったと思います。参加していただいた方々はいかがだったのでしょうか？楽しんでいただけましたでしょうか？この学会は小児科開業医やそのスタッフ達には大変興味深い学会と考えています。その準備・裏方という貴重な経験ができたこと、また、その過程でいろいろな先生方と出会えたことなど、実行委員会に参加できたことをとても感謝しています。

第16回日本外来小児科学会年次集会の運営に参加して

横浜市金沢区 ふじわら小児科 藤原 芳人

外来小児科学会はホームドクターの視点から問題点を即解決して実践に移すという目標があると思います。すなわち、子どもの視点から見たり、co-medicalの立場に立ってみたり、母親の疑問にすぐ答えたりする視点が重要で、これらを学問としてとらえ成立させることが目標ではないでしょうか。

事実、外来小児科学会は多くの先進的な書籍出版物を刊行しています。実地医科に有用な事項にあふれています。

私個人的には8年くらい前に大阪での会合に飛び入りで「禁煙マラソン」の高橋裕子先生のワークショップに参加したのが最初です。学会とは違う熱気があり、co-medicalや医学生などとの協働が強く感じられました。

この度は準備委員になって裏方の仕事をする事になりよりいっそうこの学会の意義を認識しました。結果的には二千名を越える参加者で横浜市立大学小児科学教室の先生を中心にしてこの学会に古くから参加して会に精通している市内の開業医、町田、厚木、大和、綾瀬、川崎、小田原の先生方で準備委員会を編成しました。神奈川県下の先生たちとの連携がとれ、学会終了後もメーリングリストで意見や情報交換などが続けられています。

私はMeet the expertの座長の仕事だけが主でしたので他の先生方が忙しくしているのを傍観していたような気がしています。せめてもと私の医院の従業員14人全員をマンパワーとして受け付け業務に参加させていただきました。

Meet the expertの座長は加治正行先生の「卒煙外来」で朝1番のセッションでしたので観衆がやや少なく開始時は100名くらいで寂しかったですが、終了時には200名くらいになっていました。全国的にも広がりを見せている未成年対象の禁煙外来の先駆的なお話で非常に好評でした。

参加したスタッフのうち看護師は興味のある発表が多くあったようですが、事務職方も硬いイメージの「学会」に参加して当初は緊張気味でしたが様々な病気の人がこんなにいること、家族を亡くした人の体験、患者会の存在など心を動かされた旨、感想を語ってくれました。

今回は会長をはじめスタッフ全員がアロハでし

た。イメージを明るくすること、活気を演出することそして一目でスタッフと分かるようにという配慮です。アロハは恥ずかしいといっていたスタッフが袖を通して、会場にて皆で揃ってみると仲間意識も強くなり、また学会運営の一員として自負心が湧き、「自分も頑張らなくっちゃ」という気持ちになったそうで参加者のみならず接待側からもとても好評でした。

中華街懇親会での懇親会も6カ所の店に分散して延べ600人を越す人数になりました。各店ともすごい盛り上がりで素晴らしい情報交換と親交が深まった様でした。

総じて学会は評判至極良好でしたが反省点は受付業務で事前の打ち合わせ前に来場者が大勢並んでしまったことそして予想を遙かに上回った数で混乱を生じたこと。準備したプログラムが枯渇してしまったほどでした。ビールが振る舞われた会場と絵本の読み聞かせとポスターセッションの会場が重なってしまい発表者の声が通らず気の毒なおもいをさせてしまったことが心残りでした。

今回は大学中心に実施され、規模が大きくなったので今後が大変だと思います。冒頭で私見を述べましたが本会の特色を維持していただきたいと思います。今後の本学会のさらなる充実と発展を祈念します。

第16回日本小児科学会年次集会を開催して

横浜市港北区 中野こどもクリニック 中野 康伸

「実行委員」になりませんか？とおおよそ2年前、友人の山本先生からメールを頂いた。本音はイヤだった。日常診療での疲れが、若い頃のように容易に回復できなくなっている現状で、これ以上のお役はゴメン被ると断りたかった。しかし、数々の準備委員会での活発な討論、情報交換、そして本番でアロハを着て、会場内各地を走り廻った事を思い出すと、今では達成感、充実感で一杯である。人生不思議なめぐり合いで時は流れる。横田教授とは20年ちょっと前、私がこども医療センター時代、若き日(?)の先生の帰朝講演の特別セミナーを拝聴して以来ずっと、そのお仕事、お人柄を尊敬していた。その横田教授率いる横浜市大の小児科医局の方々と、今回の実行委員会を通じて多数知り合えた事も、とてもうれしかった。西巻助教授を筆頭に、一致団結してこの会を運営してきた委員の皆さんに、心からお礼を申し上げたい。

実行委員を務めて

横浜市港南区 もり小児科 森 哲夫

2年越しの大事業が終わってホッとしているところです。当初は、大変な仕事を引き受けてしまったものだと思いましたが、準備の会合を重ねるうちに、味わい深い先生方との共同作業が楽しくなりました。実行委員のメンバーを大学同窓の枠内に限定せずに、近隣で地域医療に活躍されている先生方に広く参加していただいたのが、大変良かったと思います。横浜市大小児科の単独主催ではなく、近隣の小児科医が協力して開催した形になり、学会として幅を広くすることが出来ましたし、実行委員に参加した私たちにとっては、市大小児科同窓の外の世界の立派な先生方と直接交友関係を持つ貴重な機会となりました。学会の準備、運営の実際面では私はたいした仕事はしなかったのですが、中華街での懇親会の幹事役は、遠来のお客様に満足していただけるようかなり気を使いました。幸い、皆さん満足されたようで大役を果たせてホッといたしました。

クリニック全体でがんばった実行委員

横浜市保土ヶ谷区 星川小児クリニック
山本 淳

外来小児科学会には、開業以来スタッフともども何回も参加しましたが、今回の年次集会では、実行委員のひとりとして楽しませていただきました。ただ、私にはクリニック全体で実行委員をお引き受けしたいという思いがあり、スタッフにも常々「今まで外来小児科学会で学ばせてもらったお礼ができる機会なので、ぜひ皆もホスト役としての気持ちで学会に臨んでほしい」と言っていました。その思いが通じたのか、病児保育室の看護師、保育士は、一生懸命施設見学の準備をし、ワークショップや、教育セミナーを任されたスタッフもそれぞれ悩みながらもきちんと仕事を成し遂げてくれました。もちろん裏方の仕事も準備から後始末までしてくれました。学会のスローガンでも、「スタッフとの協働」を掲げています。当院の看護師長が、学会によってクリニックがまた成長したと喜んでくれました。準備するときは、「与える」つもりで準備したのですが、結局は「得た」もののほうが多かったかなと、クリニック一同感謝の気持ちでいっぱいです。

参加者印象記

第16回日本外来小児科学会 年次集会特集号に当たっての所感

横浜市中区 寺道小児科 寺 道 由 晃
(神奈川小児科医会 会長)

今秋、日本外来小児科学会年次集会が横浜市大小児科横田俊平教授の主催で開催された。

小児科医会と共に診療所、病院その他プライマリ・ケアの場に身を置く小児科医の集会を何故大学教授がという違和感を抱いた人がいるかも知れない。その危惧を払拭し、見事に大成功させた。集会に初参加した人々の評判も充実感と満足感を味わったとのことである。それは、15回に及ぶ集会の実績に基づく英知、若々しい発想、実行力に満ちた実行委員諸氏の結集の成果であろう。この集会をリードした横田教授が主催する必然性をいささか述べてみたい。先生が教授に選任された当時、偶々四国で開催された研究会の懇親会の席で、松山の徳丸先生にホットニュースとしてお耳に入れた折、「彼は外来小児科学会の理事で唯一大学人なんだ。これで日本に初めて小児科のG.P.を育ててくれる教室が誕生した」と喜んでくれた。このひと言が本集会を成功させた所以を示していると思う。小児科学科の理事としての活動、リウマチを中心とした臨床免疫学の泰斗としての研究、診療に献身、そして学生、卒後の教育・研修への情熱など、正に八面六臂の大活躍は一同の知るところである。この他にも、社会問題になっている小児科救急医療体制に関しても行政に提言するなどプライマリ・ケアに大きな関心を示している。

ここで、本号ニュースが第16回日本外来小児科学会集会を特集することの意義を考えてみたい。そもそも両会の会員は重複している者が多い。その活動の場は共に小児プライマリメディカルケア、プライマリヘルスケアである。小生が外来小児科学会へ参加したのは遅く、山中先生が大宮で主催された集会の折りであった。アレルギー児の麻疹ワクチン接種のワークショップに申込、参加した。実践を踏まえた全員参加型の活発な討論が印象的であった。小生も提案者に実地医家として検討事項をお願いしたが

充実感を味わった。日常臨床で今日解決したいテーマが並び、選択に苦慮、もっと機会があればなと残念に思った記憶がある。

外来小児科学会は卒前、卒後の小児プライマリ・ケアの研修に従来、力を注いでいる。既に、「小児プライマリ・ケア虎の巻（医学生・研修医研修のために）」、「同龍の巻（卒後臨床研修の手引き）」を出版している。更に感動的なのは、平成16年度にスタートした卒後研修制度2年次の小児科研修に合わせて、プライマリ・ケア研修のプログラムを日本小児科医会と共同、統一して作成することを申し入れたことである。正直、一歩進んでいる側からの率直な、真摯な姿勢が暗示していると思う。両者は談合するのではなく、切磋琢磨しそれぞれの立場で小児のために活動することである。厚労省所管の法人である医会の社会的発言力、交渉力などは大きな力として強調し、小児の医療・保健・教育・福祉等々各分野の前進・充実に寄与すべきであろう。両者は運命共同体として、渾然と活動するのが有り様ではなかろうか。僭越・独断の謗りと自覚しつつ。

「協働」を確認した 日本外来小児科学会（横浜大会）

横浜市磯子区 矢崎小児科 矢 崎 茂 義

予想をはるかに上回る2,100名の参加者は日本外来小児科学会史上記録に残るであろう。

今回の横浜大会は初めて大学が主催者となり開催されたが、県内は勿論、町田市の開業医グループも会の運営に協力した。特記すべきことには参加者の内訳がコメディカル（CM）が医師をはるかに上回ったことであろう。前大阪大会と比較しても医師の参加者は800～900人と同じ程度だったが、CM数が大阪大会の900人から1,200人と大幅に増加した。

本会の運営基本方針は「聞く、教わる会でなく、話す、自らの経験や考えを発表する会とし、討議には時間をかけてノウハウを生み出す会とすることとし、小グループを原則」であるが、CMが参加できるのもこの学会の特徴である。

小グループで集まって討議するワークショップ（WS）は今大会は49会場でどこも時間いっぱい使われて行われた。WSの事前登録者が1,100名もあった

ので準備のご苦労には頭の下がる思いである。参加者が主役となるWSにはCMが多数参加できるので、WSは外来小児科学会の中心に育ってきた。

わたしの思いついたCMの職業としては、小児看護師、保健士、助産師、小児薬剤師、リハビリ関係者、心理判定士ぐらいである。

横田教授はCMの範囲の中に、教師、建築士の名を挙げているのに、わたしはびっくりした。考えてみれば納得することだが、教師は登校拒否、ひきこもり、虐待児などに対応しなければならない。建築士はこどもに安全な建物、こどもが楽しく入院生活をすごせるような病室を作ってもらわねばならない。家族と一緒に生活しながら長期入院治療する施設（国立成育医療センター内のあのマクドナルド・ハウスのこと）などが思いつく。

WSの他、教育セミナー、公開シンポジウム会場をみてもどこも大盛況であった。

日本外来小児科学会年次集会に参加して

横浜市南区 大川小児科医院 大 川 一 義

9月2日、3日パシフィコ横浜に1,200名を越す小児を取り巻く医学看護保健育児教育など多方面に関心を持つ人々が集まった。

横浜市大横田俊平教授がこの学会の会頭と言うのも凄いが、スタッフが皆アロハシャツであるのも驚きであった。

テーマ「すすめよう！協働の輪 育てよう！探究心の芽 吹かせよう！新しい小児医療の風」に沿ったのプログラムにも若い力が充満している感じであった。第6会場のラウンジでポスター発表の場とビアパーティーとコンサート、絵本読み語りが略同時に進行していてこれも圧巻であった。こんな試みも私には全く初めての体験であった。2日目朝のジョギング、ウォーキングにも20名以上の人が参加されたと聞いた。数ヶ所に分かれた中華街での懇親会も満杯で、遅く申し込んだ私は入る余地のない状態、外来小児科学会の活力に改めて感動を禁じ得なかった。

小児科医会としても参考とすべき点が多々あり、今回の年次集会の大成功を心から祝福している。

第22回神奈川小児科医会総会 特別講演

コプリック斑のわが国への受容 — 麻疹の歴史の一断面 ③

日本医史学会 常任理事 深瀬 泰 旦
(川崎市川崎区 深瀬小児科医院)

【第14号から続く】

わが国におけるコプリック斑の受容

(1) 医学雑誌

欧米各国においてコプリック斑の重要性が次第に認められていくなかにあって、わが国ではこれがどのように受容されていったであろうか。

ある事実が教科書に収載されるためには、それが医学界においてひろく認められる必要があり、それには幾許かの時間が必要である。それにいたるまでにはその事実を外国の文献から知りえた研究者がいち早く追試して、これを国内の邦文雑誌に発表することが普通の扱いであろう。

そこで医学雑誌がコプリック斑をどのように扱っているかについて、その当時の雑誌について検討してみた。

1) 原著の抄訳

現在の『日本医事新報』のような性格をもった雑誌として、当時の医師たちにひろく読まれていた『中外医事新報』に、コプリック斑の記事がはじめてあらわれたのは、1897年(明治30年)5月5日発行の第411号である。外国文献の抄録として、その前年に発表されたコプリックの原著の抄訳が摘録欄にのっている。これこそコプリック斑についてのわが国での初出の文献といえよう。

それをみると歴史的に有名なコプリックの論文を適切に抄訳してはいるが、原著においてもちいられているpathognomonic という重要な言葉が的確に翻訳されていないのはなんとも残念なことといわなければならない。

2) 外国文献の抄訳

1900年(明治33年)までに以下のような4編の外国文献の抄録がみられる。

その第一のスラウィークの論文は、『児科雑誌』(12号 1898年)にのる抄録では「麻疹初期ノ徴候」とあるが、原論文は“Ueber das von Koplik als Frühsymptom der Masern beschriebene Schleimhautexanthem”という題名でDeutsche

medizinische Wochenschrift に発表された。このスラウィークはインフルエンザ菌による髄膜炎を最初の記述した、感染症に詳しい医師であるが、残念ながらファーストネームも生没年の不明な人物である。つぎのフンケルシュタインもこのスラウィークも報告例の麻疹患者を診察したのはホイブナーのクリニックであるという。これはホイブナーが早い時期から、コプリックの報告に関心をもっていたことを示唆するものであるということができよう。

此斑点ハ、今日マテ世医ノ注意ヲ通レタル一新必発症状ニシテ、初期診断ニハ重要ノ価値アルモノナリ、コプリック氏ノ功亦偉ナリと発見者の偉業を讃えている。

第二は「麻疹診断上コプリック氏疹ノ価値」と題して、Berliner medizi-nische Wochenschrift に発表されたフィンケルシュタインの論文の抄訳である。まずコプリック斑の解説からはじまり、その由来を述べている。発表から数年しか経過していない当時であって、まずこのような解説が必要な状況であったことを物語っている。その訳文は適切な表現とはいえないが、カタル期においてとくにインフルエンザとの鑑別診断を取りあげているのは印象的である。

第三のエル・ハウァスがWiener medizinische Presseに報告した論文の抄訳では、コプリック斑が発症前二四—七二時間ニ於テ口唇及頬ノ粘膜ニ特異ナル類青白中央点ヲ有スル不正形鮮紅色斑ヲ有スル

ことをのべ、これが麻疹患者16名のすべてに認められたので、コプリック斑が麻疹の早期診断において有用であることをのべている。

第四の論文はMünchener medizinische Wochenschrift に発表されたカール・マナッセの「麻疹ニ於ケルコプリク氏斑」の抄訳である。

此ノ斑ハ往々麻疹ノ早期症トスルノ価値アルモ、未ダイズレノ場合モ此斑ノ有無ヲ以テ麻疹ヲ診定スルヲ得ズト結論セリ

とのべて、さきの諸論文とは対照的に、麻疹の早期診断におけるコプリック斑の意義については疑いをさしはさんでいる。しかし大勢としてはコプリック斑の意義をみとめているといつて差し支えあるまい。

3) 国内文献

ア) 否認派

コプリックの原著やそれを追試した論文をうけて、わが国の医学界はどのように対応したであろうか。その後の学会や地方会では、麻疹の初期の徴候としてのコプリック斑について、賛否両論の激しい意見交換なされている様子が『児科雑誌』誌上に掲載されている。地方会の報告が現今とことなつて、そのころの編集方針であろうか、口語体で記載されていますので、そのやりとりが眼前でおこなわれているように再現されている。

1902年（明治35年）5月19日に東京帝国大学医科大学小児科学教室においておこなわれた小児科学会第24回例会で、浅田繁太郎が2年以内の経過で3回も麻疹に罹患した症例を報告しているが、ここでは診断根拠としてコプリック斑についてまったくふれておらず、長田重雄、小原頼之、福井信政ら3名の追加発言者も、コプリック斑については一言も言及していない。

下條菸菟吉は1904年（明治37年）1月から7月までに経験した87例の麻疹患者について報告し、

前駆期ニ於テ欧米学者ノ是認スルコプリック斑点ノ如キモノヲ一名ノ実験セズ

と述べている。ここにいう「実験」とは、当時の用語例では実際の経験という意味をあらわしている。

さらに1907年（明治40年）の東京地方会でも藁科松柏が「麻疹ニ就テ」の報告で

向フノ人ハ此コプリックノ斑ニ付テハ大変ニ価値ヲ置イテ、種々研究報告ヲシテ居リマスルガ、我国ニ於キマシテハ如何デアリマスルカ、……私ノ実験ニ於キマシテハ……ドウモ此コプリックノ斑ヲ類リト調べマスルケレドモ、余リ見当リマセンノデアリマス。

とのべて、発現率が低いことを裏付けている。

イ) 容認派

この状態はさらに数年はつづき、20世紀にはいってもコプリック斑についての評価はさだまらず、京都帝国大学福岡医科大学（現在の九州大学医学部）小児科学教室の黒岩直記は、1905年（明治38年）の

日本小児科学会福岡地方会例会の席上で、

Koprik斑ハ……始メテ麻疹ニ確實ノ診定ヲ与エ、早期ニ診断シ、且ツ他ノ急性発疹症ト類症鑑別ヲナスニ唯一ノ徴候タルコト世ニ知ラルルニ至レリ、然レドモ尚且ツ一部ノ学者間ニハ、之レニ異議ヲ称フル人ナキニシモアラズ

とのべ、諸外国の文献をひいて、コプリック斑の出現率は80%から90%のおおきをかぞえる報告がみられる一方、6%から21%という低率の報告もみられると発言している。ついで

我国ニ於テハ二三ノ否認的ノ報告ニ接セル而已ニシテ承認的ノ報告ヲナセルモノノ余ノ寡聞ナル未ダ之レヲ耳ニセズ

と述べて、黒岩の自験例では45名中44名、出現率は実に98%で、コプリック斑を認めなかったのはわずか1名にすぎず、44名のうち前駆期において27名、発疹期において17名の出現を認めたと報告した。

またさきの藁科松柏の発表にたいして討論にたった京都帝国大学福岡医科大学教授伊東祐彦は、麻疹の大多数においてコプリック斑をみとめるとのべている。これはさきにのべた教室員黒岩直記の報告を根拠にしている。

われわれ臨床家はいろいろな症状や所見にはじめて接したとき、それを同定することにきわめて困難を感じるのは、しばしば経験するところである。教科書をよんで、その本質なり、性状を理解しているつもりでも、それが目の前に存在しながら見落としてしまうことはよくあることである。「君、これがコプリック斑だよ」と先輩から親しく教えるをうければ、次からは見落とすことはまずないものである。

藁科の報告にたいして、伊東祐彦とともに討論に加わった波多野俊太郎は、この間の事情を次のように述べている。

今年ノ麻疹流行ニ就テ、コプリック氏斑ヲ注意シテ見タイト考ヘ、二三ノ書物ヲ見マシタガ、ドウモイロイロ書イテアリマス。ソレニ自分が、是ガコプリック氏斑デアルト云ツテ指導ヲ受ケタ事ハゴザイマセヌシ、大キニ困リマシタ。ソレカラ小児科医局ヘ行ツテ先生方ニ伺ヒ、又図ヲ拝見シマシテ大イニ得ル所ガゴザイマシタ。

このようにしてコプリック斑を眼底に強く焼きつけたものにとっては、その後の発見は容易になる。波多野俊太郎はつづいて

自分ノ見マシタノデハ可ナリ多数、殆ド三分ノ二、

或ハ其以上モコプリック氏斑ヲ認メルヨウニ考ヘマス。

とのべている。些細な例に過ぎないかもしれないが、こんな所にも臨床医学の難しさが感ぜられる。

1907年（明治40年）の第12回日本小児科学会総会で、麻疹のさいの血液学的変化についてはじめて報告した京都帝国大学医科大学の本庄謙三郎は、診断根拠としてのコプリック斑の意義を強調し、12例中の10例にコプリック斑を認めたと報告している。このように1907年（明治40年）ころには、コプリック斑の診断的価値は次第にひろく認められるようになったのである。

（2）小児科書——『児科必携』（弘田長）

わが国における近代小児科学の最初の教科書は東大小児科初代教授弘田長の『児科必携』である。本書は弘田がドイツのストラスブルク大学に留学して、オズワルト・コーツ教授のもとで学んだ小児科学を中心にして、ドイツのエデュアルト・ヘノッホ、アルフレート・フォーゲル、カール・ゲルハルト、イギリスのチャールズ・ウェストなどの著書を参考にしてまとめたものだが、あくまでも治療法を中心にしたメモ書様の著書にすぎない。そのため疾患の定義や原因、症状、所見などについての記載はなく、外国の教科書にくらべるとまことに物足りない。初版が出版されたのは1888年（明治21年）で、コプリックの報告以前なので、これにはもちろんコプリック斑についての記述はない。

その後の『児科必携』の各版を通覧すると、増訂6版（1901）では本文の記事の体裁がおおいにあらたまり、個々の疾患について、まず原因の項をたて、ついで症候、療法とつづいて、今日の教科書と同様の体裁をとっている。その麻疹の症候の項には本文に比して1ポイント小さい活字で

米国「ニューヨーク」ノ「コプリック」氏ガ、麻疹発疹前ノ初兆トシテ、口粘膜中下顎臼歯ニ相対スル頬粘膜ノ部ニ不正形状ノ紅斑アルコトヲ…報道シテ以来、小児医ノ賛同スル者少ナカラズ。とあって、コプリック斑が小児科医の間で市民権をえつつあるものの、確固たる地位を獲得していない状況をしめしている。

学会報告や雑誌への投稿論文において、コプリック斑についての報告が増加するにつれて、増訂11版（1909）になると、さきの6版で本文と別に小さな

活字でしるされていたコプリック斑の記述は本文の中に組いれられて、小児科学会においてひろく認められるようになった様子を知ることができる。

此前駆期第二日ノ終ヨリ、口腔粘膜ニ白点アル帽針頭大ノ暗赤色、若クハ赤色斑数箇ヲ屢々認ムルコトアリ、「コプリック」斑即之ナリ、多クハ麻疹ノ前兆トナル。

ここではコプリック斑とはっきり言いきっているのが注目される。学会の趨勢がコプリック斑を認知しようとの報告に傾いているので、それを無視するわけにはいかなかったのであろう。この記述からもわかるように、1909年にはコプリック斑が学会において完全に認知されている様子を知ることができる。

なお蛇足ながらこの小児科書はさらに版をかさねて、1921年（大正10年）の15版をもって最後の出版となった。実に33年におよぶ長期にわたって小児科医から愛用されていた成書であったといえよう。

む す び

1896年にはじめて報告されたコプリック斑は、およそ10年あまり経た1907年にわが国の小児科学界に定着した。しかしコプリックの生国であるアメリカから直接ではなく、ヨーロッパ経由の文献によってわが国に紹介されたのである。これによっても当時の世界の医学界におけるヨーロッパ優位の趨勢と、わが国の医学がヨーロッパにいかに依存していたかをうかがうことができる。

本稿の要旨は第273回日本小児科学会神奈川県地方会・第22回神奈川小児科医会総会（2005年3月19日）の特別講演において発表した。この機会をあたえていただいた神奈川小児科医会寺道由晃会長はじめ会員の方々に心からの感謝申しあげる。

「地域連携小児夜間・休日診療をめぐって」

— 2つの中核病院小児科の場合 —

済生会横浜市南部病院の場合

～小児科部長の立場から～

済生会横浜市南部病院 小児科部長
甲 斐 純 夫

日頃から神奈川小児科医会の先生方には大変お世話になり、ありがとうございます。地域連携小児夜間・休日診療も先生方のご厚意があって始められたことと大変感謝しております。この場をお借りして御礼申し上げます。

当科では本年7月に診療開始の届出を行い、8月から診療所の先生方に出動して頂いています。月10日程ある二次救急輪番日の中から先生方が出動可能な日を選んで頂き、20時から23時まで連携医として外来診療を担当して頂いています。輪番日には常勤医と2年目の初期研修医も小児科当直をしており、連携医の診察時には研修医が検査や処方オーダーの補助を行っています。

横浜市の小児救急医療拠点病院指定により今まで3ブロックだった救急医療圏が細かく分割され、各拠点病院が近隣の3～4区を常時カバーする体制になりました。当科を利用される患者さんの75%は港南区、磯子区、栄区在住の方であるため、主にこの3区の診療所の先生方と協力して初期救急を整備することが、患者さんと診療所の先生方の双方に利点が多いだろうと考えていました。しかし診療所の先生方が小児救急に積極的に関わりたいという意志をお持ちでなければ連携診療は成り立ちません。その辺りの感触が分からないまま、以前から親交のある診療所の先生方に相談したところ、少しでも病院小児科医の負担が軽減されるなら、また同じ救急に関わるのなら自分のクリニックの医療圏内でやりたいから、と快諾を頂くことができ、更に個人的に他の先生方にもお声を掛けて頂きました。協力を申し出て頂いた先生方の小児救急に対する熱意を感じ、大変

嬉しくまた頼もしく感じました。そのような個人的なつながりで計画はスタートしたのですが、最終的に港南区及び近隣6区の医師会長にご了承を頂いた後、診療開始に至りました。

本年4月以後、当科の救急患者は昨年より準夜帯で18%、深夜帯では160%増加しました。小児科常勤医は8人おりますが、深夜帯に働き続ける身体的、精神的な疲労感は大きいものがあります。連携診療時間中は深夜の診療に備えて体を休められると同時に、若い勤務医にとっては、困った時に相談できるベテラン小児科医が院内にいる、という安心感も大きいです。

また今年度の診療報酬改訂により、24時間小児診療体制を整えた病院では地域連携小児夜間・休日診療料が450点に増額されました。診療単価の低い病院小児科にとってその額は小さくなく、当科では外来収益が6%前後増収になりました。

一方、診療所の先生方には病院医師との意思疎通が図りやすくなることを期待し、さらに患者さんにとっては、かかりつけの先生に診てもらうことで安心と診療の継続性が得られるのではないかと考えています。

現在連携医として出動頂いているのは、港南区の森先生、竹田先生、半澤先生、伊部先生、磯子区の藤田先生、栄区の吉田先生の6名です。出動日数は8月が3日、9～11月が5日で、受診患者数は一日1～7人、平均4.1人でした。時期的にまだ患者さんが少なく、大きな問題も生じておりませんが、続けていけば出てくるであろう様々な課題をその都度解決しながら、本診療を推進していく所存です。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

～開業医の立場から～

吉 田 義 幸

(横浜市栄区 吉田こどもクリニック)

私は平成18年8月から横浜市南部病院で地域連携小児夜間救急診療に参加していますが、参加するに至った経緯と参加した感想を述べたいと思います。

昨年の初めころでしょうか、南部病院小児科部長の甲斐先生と偶然電車の中でお会いし、同院での2次輪番の当番の日の小児夜間救急を開業医の医師にお願いしたい、という話しをお聞きした。その際、私は以下の理由から、興味があります、とお答えした。

その理由とは、私の開業している栄区では夜間の小児救急を診療しているのは栄共済病院のみであるが、最近では小児科医の減少に伴い2次輪番の日のみ夜間診療が行われているにすぎない。栄区に隣接する港南区の南部病院は4月から小児夜間救急の拠点病院になり、深夜の1次診療を開始した。栄共済病院、南部病院ともに、私のクリニックから車で10分の距離である。横浜市南西部夜間診療所、桜木町夜間診療所はともに車で40分以上かかり、栄区からの利用者は非常に少ない。患者さんは栄共済、南部病院以外は鎌倉のS病院や、戸塚区のSクリニックを利用しているようである。栄、港南、金沢の3区から近い横浜市南部地域に夜間診療所が出来ると良いと思っているが、横浜市の計画も予算の関係もあるのか、最近話に聞かない。桜木町や南西部夜間診療所に医師会員として協力していたが、出来れば地元の患者に直接役に立てる小児夜間救急医療を行いたいと思っていた。また、病院の救急外来を使用し、医師会と病院が協力して病院オープン方式で夜間救急を行う方法があると知り、興味を持っていた。そこへ甲斐先生からの話があり、前記の様な返事になったわけである。

本年6月下旬に南部病院の地域医療連携室から連絡があり、7月6日に南部病院で説明会が行われた。あらかじめメールにて質問事項を送り、主にその質問に答える形式で説明が行われた。要約すると、1、南部病院共同利用制度における登録医の有志の小児科医で、覚書を結んだ医師が診療を行う。2、2次輪番日の1次医療のみ(紹介患者は病院医師が診察)

で、必ず小児科研修医が付く。処方、検査オーダーの際の、パソコン指示は研修医が入力可能。3、勤務時間は20時～23時。4、入院の際は、病院医師に引き継ぐ。5、手当ては昼間の非常勤医師の規定の半日に準ずる(経験10年以上で33,000円)。6、医療訴訟の際は、本人が訴えられた場合も、職員に準じて、病院、登録医が協力して対応する。

以上の会議を経て、覚書を提出し、8月15日から診療を開始した。7名が登録し、回数は月にほぼ1回である。10月まで3回出勤したが、患者が少ない時期でもあり、患者数は20時～23時までで1桁であり、ゆっくり丁寧に診療できた。看護師が電話でトリアージを行っており、ごく軽症の患者は来院しないせいか、夜間診療所より、やや重症な患者が多い。検査は病院であるので、血液検査はもとよりレントゲン、CT等も可能である。私は、南部病院に以前勤務していたが、18年前のことであり、病院での外来は自分のクリニックや夜間診療所より幾分緊張する。勤務時間が23時までであり、また自宅が病院より車で5分なので、勤務は今のところ大きな負担にはなっていない。ただ、今の2次輪番のみの勤務形態では、病院小児科医の多少の負担の軽減と、病院への地域連携小児夜間・休日診療料(登録医が出勤しない日も含めて夜間・休日の6歳未満の救急患者1名に450点追加)の加算のメリットはあるであろうが、地域住民患者へのメリットは、2次輪番日での小児急患の待ち時間が少なくなるということのみではないのか?という思いは否定できない。

始めてみなければ、何も始まらないというのが自分の信条であり、とにかくしばらくは今の地域連携小児夜間救急診療に参加してゆきたいと思っています。その中で色々な問題点を解消し、より地域の小児救急患者へ貢献できる、小児夜間・休日救急医療システムに発展してゆければと考えています。

～小児科部長の立場から～

横浜労災病院 小児科部長
城 裕 之

横浜労災病院は、開院以来、横浜市北部医療圏の中核病院として小児救急に積極的に取り組んできました。今年度、横浜市の小児救急体制が変更されたことに伴い、平日夜間・休日に当院を受診する小児救急患者が増加しており、スタッフ一同その対応に終わっています。

増加する小児救急患者に対応するための対策が種々のレベルで検討または実施されており、その一つが病診連携の強化です。従来から、「地域連携小児夜間・休日診療料（300点）」が認められていました。その要件は、①小児を夜間、休日、深夜のうち、あらかじめ定めた時間として地域に周知された時間に診療できる体制を有していること。②近隣の保険医療機関を主たる勤務先とする専ら小児科を担当する医師が3名以上いること、です。

今年度の改定により、③小児を24時間診療することができる体制を有し、小児科を担当する医師が常時配置されていることの条件を満たせば、450点が算定できることとなりました。小児救急を円滑に行うためには、マンパワーの確保とマンパワーを雇うことのできる収入面での裏付けが必要です。そういった意味で「地域連携小児夜間・休日診療」の改定は、病院小児科にとって画期的なことと考えています。

「地域連携小児夜間・休日診療」を開始するにあたり、当科OBの小児科医と横浜市東部小児科医会（中野康伸会長）の先生方の協力を得て、今年、9名の小児科の先生方に登録して頂きました。当院は電子カルテですので、初年度は当院のシステムに慣れていただくことが重要と考えました。なかには、当院の電子カルテにすぐ慣れて、毎月1回、日曜日に数時間診療をしていただいた先生もいて、逆に私共が驚いています。普段は出来ない検査、レントゲン、CTをすることが出来て楽しかった言う感想を述べられていました。また、ご自分が紹介した患者が入院していて、病室に行かれてその後の経過をみていかれた先生もいました。

登録医9名の先生方のお名前は、病院内の3箇所（総合受付、小児科外来、救急外来）に掲示されています。お母様の中にはそれを見て、その中からホームドクターを選ぶ方もいらっしゃいます。今後、登録医の先生方のお名前を当院のホームページにも掲載し、ホームページをお持ちの先生であれば、リンクを張らせて頂く予定です。また、子供を外来に連れて来られたお母様で、まだ、ホームドクターを決めていない患者さんには、登録医の中から選ぶことを勧めています。ご家族からすると、当院に登録されていることが、ホームドクターを選ぶ際の安心の材料となっているようです。

その他に、登録医には、院内を自由に出入りすることのできるノンタッチカードや駐車場のパスカードもお渡ししています。図書室もいつでも利用することができます。

病院に勤務する小児科医はとかく病院にこもりがちです。また、病院へ気軽に訪れる開業小児科の先生方もほとんどいません。開業の先生方とのコミュニケーションは、患者紹介の手紙、電話と年に数回の勉強会がほとんどです。「地域連携小児夜間・休日診療」は、閉鎖的であった病院小児科を地域の開業医の先生方が来やすい、よりオープンな病院小児科へ変化させる弾みをつけてくれたとすることができます。「地域連携小児夜間・休日診療」の効用とは、結局、開業小児科の先生方が定期的に病院へ来て下さり、小児救急患者の診療を行うことにより、病院小児科と開業小児科の先生方が仲良くなれたことではないかと考えています。病院小児科と開業小児科の先生方が仲良くなって、お互いが協力して小児救急医療と戦って(?)行こうではありませんか！

来年は2年目となります。小児科1年目の後期研修医（医師としては3年目）の教育もお願いできればと考えています。さらに登録医を増やすとともに本制度が実質的なものとなるようにスタッフ一同努力するつもりです。最後に、本制度を理解し、ご協力を頂いた横浜市東部小児科医会の有志の先生方に紙面を借りて御礼を申し上げたいと思います。

～開業医の立場から～

横浜市東部小児科医会 会長
中 野 康 伸
(横浜市港北区 中野こどもクリニック)

平成18年1月1日付けで、横浜市東部小児科医会が、横浜労災病院と締結した。地域連携小児夜間・休日診療運営規定の「目的」に書かれた内容全文は以下の通りである。

第1条 横浜労災病院は、横浜市北東部中核施設として小児救急医療の充実を図るため、厚生労働大臣の定める地域連携小児夜間・休日診療施設として、夜間、休日の小児科外来を、横浜市東部小児科医会登録医（以下「登録医」という。）である近隣の小児科医に開放し、協力して診療にあたる事を目的とする。

今回の特集のテーマのエッセンスは、全てこの一文に網羅されていると思う。実は、この協約規定を私達開業医が受け入れるか否か2年以上にわたって、東部小児開会及びその幹事会において活発な議論が行われた。

当時の小児科部長（現副院長）の郡先生は、会がある毎に、とにかく、今のままでは横浜労災病院の小児救急医療は何れマンパワーからして破綻するという旨を繰り返し発言されていた。横浜市労災病院とほぼ時を同じくして開業した筆者が、その前、あるいはその後開業された仲間にとって後方支援病院の危機は放置できなかった。医局からの小児科医派遣の停滞などの実情も理解できた。そして、小児科医の当直表をある時見せてもらい、自分達が病院をしていた時以上に、過酷な労働をせざるを得ない内情もよく分かった。人を増やせば全て解決するわけではないが、人がいなければ何もできない。しかし、しばしば幹事や会員から疑問があがった。病院をリタイアしてかなり時が経つのに、人間関係もソフトも（電子カルテである）理解できず、一体何ができるのかと……。それに対して病院側は、「開業医ひとり診療はさせない。必ず傍らに勤務医をつける」という回答であった。これが冒頭の「協力して診療にあたる」という一文に盛り込まれたのである。事実、筆者も9月9日の救急の日、病院救急に出勤したが、卒後3年目の優秀な先生と楽しく仕事できた。

何れにしても、何度も激論をくり返し、東部小児科医会総会、港北区医師会理事会の承認を得て、平成18年1月1日より運営が始まったのである。この間、横浜市夜間救急センター体制の見直しなど不測の事態もあったが、何とか1年間、参加意思表示された登録医の先生方の努力もあってほぼ目的を達成することができている。今後の課題としては、開業医が協力する事によって加算された病院診療報酬が、きちんと当初の説明どおり、小児科医の増員経費に振り分けられているのかという事を、幹事会、総会などで検証していく必要があるという事である。そして、登録医の報酬や枠の拡大など、他区の先生方から寄せられたいくつかの疑問を先行した地区として、会員一丸となって、取り組んで行きたいと思っている。

「今後の日本脳炎予防接種に関する、 神奈川小児科医会としての指針」

神奈川小児科医会会長 寺 道 由 晃

平成18年 9 月11日

地区小児科医会代表者 殿

神奈川小児科医会幹事 殿

拝啓 虫の音がしみじみと聞かれる季節になりました。御健勝に御活躍，心からお慶び申し上げます。日ごろ，神奈川小児科医会にご協力下さり心から感謝申し上げます。

早速ですが，9月7日の神奈川小児科医会幹事会において「日本脳炎ワクチン接種」について協議がされました。

昨年5月，ADEMとの因果関係が否定できないこと，また，マウス脳を使用しない新ワクチンが開発中であることから，積極的な推奨を中止する事態となりました。

自治体によっては，配布されたワクチンの一時引き上げがなされました。しかし，希望者には事情を説明して，同意書を記入すれば接種することが可能となっております。

新ワクチンの開発が待たれるところでありますが，その新ワクチンが医薬品医療機器総合機構の審査で，例数追加の指示により承認されませんでした。

一方では，長期間推奨中止が続けば，日本脳炎の流行も危惧されることから，むしろ積極的に接種した方が良いという意見もあります。

こうした状況から幹事会において，出席幹事の各地域での状況と幹事自身の対応を御報告いただきました。

概略を記しますと，県内各地区小児科医会として接種した方が良いと合意している地域と見解を出していない地域（ほとんどの地域がこのケース），自治体から承認書を取って接種をと言われているが，現実には行われていないところがあります。出席幹事の個人的対応の多くは同意書を取って接種しているが，例数は多数ではないとのことでした。

神奈川小児科医会として見解を会員に示すべきであろうとの合議に従って，流行地への旅行，その他接種を希望する方には，説明の上同意書を取り，日本脳炎ワクチンの接種をしていただくべきことをご連絡します。

ちなみに，横浜市で用いられている説明書と同意書を添付します。また，厚労省から県宛の勧告（平成17年5月30日），通知（平成18年8月31日），並びに昨年出された宮崎県の資料を入手しましたので併せて添付します。大変参考になりますので是非お読み下さい。

本状は幹事及び各地区代表の先生方に御通知しますので貴会会員への周知をよろしくお願い申し上げます。

先生方の益々のご健康，ご活躍を念じます。

敬 具

・・・編集後記・・・

神奈川小児科医会 広報委員長 大川 尚 美
(横浜市港北区 大川小児クリニック)

1年2回の発行になったが、なかなかタイムスケジュールが守れないで反省している。広報小委員会と言っても実情は、事務局と私の手仕事なので遅々として編集が進まなかった。

今回の眼目は何と言っても「外来小児科学会年次集会」関連の記事である。これ程素晴らしい学会に今まで参加した経験は、私は無かった！神奈川小児科医会員としても誇らしく思う。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・



手動式医薬品注入器

ジェントロピンペン® G5.3/G12

 **Genotropin Pen® G5.3/G12**

※禁忌・禁止、操作方法又は使用方法等、使用上の注意等については製品添付文書をご覧ください。

指定医薬品、処方せん医薬品^{注)}

遺伝子組換え天然型ヒト成長ホルモン製剤 [薬価基準収載]

ジェントロピン® 5.3mg・注射用12mg

 **Genotropin® 5.3mg・Inj. 12mg**

注射用ソマトロピン(遺伝子組換え) 注) 注意—医師等の処方せんにより使用すること

※禁忌、効能・効果、用法・用量、使用上の注意等につきましては製品添付文書をご覧ください。

製造販売
ファイザー株式会社
〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7
資料請求先：お客様相談室

2006年8月作成